

TAKE FREE

社会医療法人友愛会

FACE

VOL.010 2023.07

社会医療法人友愛会をかたちづくる人々



実践に こだわる

友愛医療センターの初期・専門研修

友愛医療センターの 初期臨床研修

ここから始まる、医師としての第一歩。 病院全体で研修医を支える

限られた2年間で一定水準以上の総合的な知識と手技を習得してほしい。そんな指導医たちの熱い思いが詰まった独自の研修プログラムがここ、友愛医療センターにはあります。

当院は医師だけでなく病院全体で「研修医に教えよう」という意識を高く持ち、教育に熱心に取り組んでおり、在籍する100人以上の医師、1000人を超えるスタッフによる全面的なサポート体制が整っていることが最大の魅力といえます。

当院は救急医療にも力を入れ、県内でも有数の救急患者の受け入れを行っているため、数多くの救急症例の経験を積むことも可能です。内科の池原泰彦部長が経験した数多くの症例を分析し、取りまとめた内科症例コンテンツは、Eラーニン

グの仕組みを活用して24時間365日、時間や場所を問わず症例について学習できるツールで、研修医はもちろん指導医の先生方にも好評です。研修医が担当した症例に対する指導医のフィードバックもアプリ上で閲覧でき、反復学習をすることで診察時の速やかな診断につながっています。

実際に起こりうる外傷患者への処置・対応を実践的に学ぶ外傷初期診療トレーニング「TOMITEC」は、JATECをベースに髙下英次郎副院長が考案しました。具体的な状況をシミュレーションし、人形を活用しながら現場を疑似体験して学ぶことで、実際に患者が運ばれてきた際によりスムーズに初期対応ができるようになることを目標としています。

そして内科や外科のジェネラリストとしての経験を積むと同時に、心臓血管外科や脳神経外科、形成外科といった専門領域の研修を選択して履行できるのも友愛医療センターの研修の大きな特徴です。

友愛医療センター群星沖繩・RyuMICプログラムにおいては、各種教育回診を受講できるのはもちろん、院内で開催される数多くのカンファレンスや勉強会にも参加でき、ジェネラリストとスペシャリストの経験を同時に得ることができます。当院では既に働き方改革に合わせた研修の勤務体制についても取り組みを進めています。

今年も、友愛医療センターには新たに14人の研修医が仲間

に加わり、熱心な指導医たちと充実した教育体制のもと、医師としての第一歩を踏み出しています。指導医として後継者を育成するのは当然のことですが、医学的知識だけに限らず、日常生活や医師としてのあり方についても導いてあげられるような指導医でありたいと考えています。

当院の医局は一つのフロアにまとまっており、先輩医師や他科の先生にも気軽に相談できる環境があります。診療科の垣根を越えてコミュニケーションが取りやすく、必ずや研修医の良き相談相手、良き同僚となってくれるでしょう。 ■

研修管理委員長 嘉数真教

常に未来を見据え、医師の育成に
高い使命感を持って取り組む指導医たちがいる。
その教育にかける思いとは。

現場で研修医の教育に携わる3人の医師に話を聞いた。

「自分の知識を人に教えることで、その知識が自分の中で確立される」。私が研修医として入った県立中部病院では、そのようなスピリットが脈々と受け継がれていました。先輩が後輩を必ず教える、そして自分が教えてもらった以上は、自分も後輩に教えないといけないというように、この考え方が後に沖縄の研修が“屋根瓦式教育”と呼ばれるようになる所以です。私も研修の当時から後輩に教えるからには曖昧ではいけないと、常に教えることを意識しながら診療に励み、症例について一生懸命調べたり、稀な疾患を経験した際にはどうしたら見逃さないかを考えて、診療のポイントなどを書き留めたりしていました。年次が上がるにつれて、それを昼休みのレクチャーで後輩に講義をするととても好評で、私の教育に対するスタンスはその時に固まったのだと思います。

学生時代、私は何科の専門に進むにしても、瀕死の患者さんを目の前にして、少なくとも“専門ではありません”とは言わないような医師になりたい、そう思っていました。しかし、現実には厳しかった。中部病院の研修では米国で外科専門医を取られた先輩医師から外科教育全般を教わり、多くの手技を経験したのですが、それでも自信が持てない分野がありました。そこで、北米の胸部外科の父と呼ばれる故Griffith Person先生に直接手紙を渡し、カナダのトロントに留学して専門研修を2年間受けました。英語ではとても苦労しましたが、世界で初めて肺癌手術に関するRCTを行った故Robert J. Ginsberg先生に教えを受け、さらに日本の10年、20年分を1、2年で行えるほど手術症例が充実している環境で、1日4例の肺癌手術をこな

友愛医療センター副院長

DAKESHITA
Eijiro 嵩下英次郎

すなど多くの症例を経験し、少しは自信を持って沖縄に帰ってきました。その後もずっと手術をする環境に身を置いてきたのですが、最初に掲げた目標にやっと手が届いたと思えるようになるまでには30年もかかりました。

友愛医療センターで研修に携わる上で、患者さんをきちんと診て、診断して治療できるという臨床医の基本を伝えたいと思っています。初期の2年間で教えないと外傷治療に一切タッチできない人が出てくるかもしれないと思いJATECをベースにTOMITECを考案し、県内にいながら外傷シミュレーションの研修をできるようにしました。そして気管切開や胸腔チューブの挿入については、緊急のときにもものすごく緊張するので、通常の手技のレクチャーに加えて2年ほど前からタイムトライアルを実施してより実践に近いトレーニングに進化させました。プログラムは「もし自分がもう一度、初期研修をやるならどうい

う教育を受けたいか」という観点で組み立てています。

研修医の先生方には将来どこの診療科に行くにしても、医師として目の前の瀕死の患者さんをきちんと診断して助けられる知識を最低限は持ってほしい。私はその思いで、若手医師が当直時や緊急時に対応できるようになることを目的に、これまで行ってきた手技や診断の考え方についてイラストを多用してまとめ、30年の経験を凝縮した医学書『緊急対応外科手技マニュアル』（中外医学社）を5月に出版しました。1年目の研修医が私のレクチャーを受け、見逃されやすい上腸間膜動脈血栓塞栓症を当直で診断したときには本当に嬉しかった。この疾患を見逃してしまえば、腸壊死が進行して救命できても栄養の吸収に支障が出るおそれがあります。美味しくご飯を食べるとい一つ楽しい人生を送れなくなるか、しないかは教育にかかっているのだと実感しました。誤診をしたら非常に大変な思

いを患者さんにさせてしまう疾患や、診断ができていれば助かる命があるということを研修医の先生には常に頭に入れながら診察してほしいです。

私自身、仕事に没頭してきてここまで仕事の話ばかりになりましたが、医師をする上ではオンオフの切り替えも大事にしたいです。余談ですが、かつて過重労働によって失われた命があることを知り、ワークライフバランスを意識するようになってから、プライベートでは人生でやりたいことをしようと思ひ、医師の傍らアイスホッケーに打ち込んで国体に出場したり、ヨットを購入してレースに出場したりしました。今はもっぱら自転車で、週末は50キロほど走っています。仕事は体が資本ですし、体力がないと人に優しくできなければ自分の仕事以上の教育もできません。若手医師の皆さんにもオンオフの切り替えと、エネルギーを維持するための体力づくりもぜひしてほしいですね。 ■

瀕死の患者さんを
救命できる知識を
持ってほしい

循環器内科

平田一仁

HIRATA Kazuhito

当院は地域の中核病院として救急患者・紹介患者も多く、多種多様な症例を経験できる素晴らしい環境にあると思います。医師の働き方改革にも積極的で、過度な負担がなく、かつレベルが高い研修を提供しています。

約40年前に遡りますが、私は県内の市中病院で初期研修をスタートしました。当時を振り返ると、3日に1回の当直で、明けも通常通り勤務するなど今とは別世界のような過酷な研修でしたが、救急室で毎回どんな患者にあたるのかワクワクしたことを覚えています。そのまま後期研修に進み、途中からは心臓を中心に学びました。当時の部長の方針で専攻医となってもすぐにはカテをさせてもらえず、最初の半年は上級医が施行したカテのレポート作成をいやになるほどやらされましたが、この間にカテテル検査解析の基礎を学び(当時は駆出率計算も、弁口面積の計算も全て手作業でした…)、まさに「循環器内科医は圧でものを考える」という基本を徹底的に叩き込まれました。半年を過ぎてから、診断カテをほぼ全て施行させてもらい、やっと人參にありつけた馬車馬のように手技を勉強しました。また当時理学所見の達人であるJ.Constant先生に教えていただく機会がありベッドサイド診察の面白さに目覚め、その後卒後6年目から2年間、米国の大学病院で臨床心臓病フェローとして修練する機会にも恵まれましたが、その時もカテテルのみでなく、理学所見、電気生理、エコーなど幅広く研修し、Cardiovascular Teaching Lab. で学生を教える経験もしました。

循環器内科医というと、どうしても手技中心になりがちですが、私もカテ・PCIに没頭する傍ら、ずっと継続して身体診察・心電図などを勉強できる機会に恵まれたことはとても幸運でし

た。私が指導医として、研修医の先生に教えてあげられることは、いかにして基本的な理学所見・ECGなどの情報をエコーやカテテル検査と統合して判断し、診療に活かすかをベッドサイドで示すことであり、総合内科のおよびgeneral cardiologistとしての視点を持って診療にあたるよう指導していくのが私の役割だと思っています。なるべく客観的に教えられるように、ECGもとれる電子聴診器に興味深い心音を記録したりiPadに頸静脈の動画を記録したりして、研修医やスタッフと共有できるように工夫しています。

また、おきなわクリニカルシミュレーションセンターでハーベイ(心臓理学所見シミュレーター)を使用した研修会(研修医のみならず、スタッフ医師、看護師他も参加)をもう10年以上続けています。教えることは学ぶことと言われますが、研修医の質問からこちらが勉強できることも多く、研修医と触れることこそ、日々の診療のモチベーションとなっています。

学術的な取り組みとしては、当院で日々診療しながら、自分自身が興味深かった症例を研修医の先生に九州沖縄だけでなく、全国レベルの学会で積極的に発表してもらうことを目標にしています。去年は1名のみでしたが、今年は3名が内科学会総会の「ことはじめ」というセッションで発表してくれて、全国の有名研修病院や大学病院からレベルが高い発表がある中、2名が優秀賞を受賞し、とても嬉しく思いました。

研修医の先生には自分自身で一生追いかけていけるテーマを見つけて、自律的に勉強し、積極的に(できれば英語で)発信できるよう心掛けてほしいです。自分が今やっていることが本当に役に立つのか疑問に思ったり、思うようにいかなかったりの毎日ですが、いつか色々な知識が繋がって診療が楽しくなるときが必ずあります。体に気をつけて「その時」を信じて日々の研修や診療に取り組んでください。 ■

友愛医療センターには熱意ある指導医がそろい、日々の診療で忙しい中でも「積極的に教えたい」という気持ちの強い先生方が多いと感じます。そのため、初期研修医にとっては身に付けるべき知識やスキルを手厚く学べるのが魅力ではないでしょうか。私自身もエネルギー溢れる若い先生方と関わることは楽しく、モチベーションにも繋がっていますね。また、沖縄での初期研修は医療施設の枠を越えて基幹病院が連携する「群星沖縄」というプログラムが特徴で、外部の先生方を招いた症例検討会や発表の機会が充実していると思います。

当院の小児科では、0才～15才(中学3年生)の患者さんを診療していますが、研修医の先生には赤ちゃんを中心に診察のポイントを指導しています。患者さんを2、3人担当してもらい、成人とは異なる点も多い小児の外來から入院、退院までの評価と一緒に学びます。重症化した場合は専門施設に転院搬送することもあります。研修ではそこにも同行して、軽症から重症まで幅広く対応するところを体験してもらっています。研修医がローテーションで小児科を回る1ヶ月で学べることは限られますが、他科に行っても応用できる知識やスキルも教えられるよう心掛けています。以前、研修医と一緒に熱性けいれんの小児患者を対応したのですが、別の日に当直で同様の患者さんが来院した際に、その研修医の先生が自ら判断して見事に対応してくれたときは、教えたことが生かされたと感じた瞬間で嬉しかったですね。

私の研修医時代はというと、出身大学の北里大学病院で初期研修を過ごしました。2ヶ月おきに主要な内外科を回ってしっかり学んだのですが、当時その病院ではルート確保や採血、物品用意まで全て初期研修医の仕事で、とにかく数をこなすうちに2年

間でどんなに細い血管でもどんなに血管が見えづらくてもほぼ取れるようになりました(笑)。子どもは特にルート確保が難しいことも多いですが、今でも苦手意識なく対応できています。皮膚科や膠原病内科にも興味がありましたが、子どもに癒やされることが多い小児科を最終的には選びました。専門研修では神奈川県総合病院で小児救急を専門に、現場でドクターカーに乗ったり、ICU管理で重症例を経験したことが、今とても活かしています。

小児で大切なことは、やはりコミュニケーションの取り方です。子どもは痛みを自分で上手く表現できないこともあるので、診察した際の顔の表情や声の出し方、泣き方、そして見た目など、子どもの様子をよく観察しながら五感を使って症状を読み取る必要があります。声掛けも成人とは違って、視線の合わせ方や距離の取り方、声のトーンにも気を付けて子どもの気持ちに寄り添うよう心掛けており、そうした接し方は研修医の先生方にも丁寧に教えています。

初期研修で大事なことは、フットワークを軽く何事にも学ぶ姿勢を持って、特に担当する患者さんの疾患を掘り下げて学ぶことだと思います。医療はチームで行うものなので、コメディカルとのコミュニケーションを密に取ることも医療の現場ではとても大事です。

初期研修は医師の土台となる大切な2年間です。医学生には自分の目で現場を確かめて、納得のできる病院を選んでほしいと思います。 ■



小児科医長

玉那覇瑛太

TAMANAHA Eita

チャレンジを
後押し
してくる



初期臨床研修17期生
白石ゆり子

沖縄県立南部医療センター・
こども医療センター専攻医

医療に携わりたいと何となく意識し始めたのは、中学生の頃に友人から摂食障害の悩みを打ち明けられ、「何か助けにないだろうか」と思いを巡らせていたときでした。自分を頼りに心を開いてくれたことが嬉しく、私の中で医師を志すきっかけの一つになっています。その思いは変わらず愛媛大学医学部に進学しました。広島県出身ですが、卒業後の進路を考えていたとき、各病院がグループを組んで一緒に頑張れるような体制がある群星のプログラムに惹かれて沖縄で研修を受けようと思いました。県内の病院をいろいろ回って見学しましたが、当時の豊見城中央病院（現：友愛医療センター）の看護師さんがとても優しく、病院全体の雰囲気もとても良かったので、初期研修先を選びました。

実際に研修を受けてみると、医師が同じフロアに集まっているので全員の顔が見えて、とてもコミュニケーションが取りやすかったですし、上級医のサポートがすごく手厚かったです。例えば、池原泰彦先生（内科部長）は私が当直で診た症例を、次の日に時間を割いて全部一緒に振り返りをしてくださいました。何が正解か分からない中でやっていくのはとても不安ですが、「こうするとよかった」というフィードバックをもらえるのは前に進んでいる実感も得られますし、本当にありがたかったです。

また、山内素直先生（救急科部長）の全面的なサポートを受けて、アメリカ救急医学会学術集会のポスター部門において、腕に漁業用の巨大な釣り針が刺さった救急患者の症例を取り上げ、最高賞を受賞できたのも非常に貴重な経験でした。先生の呼びかけで挑戦することを決め、診療の合間を縫って現病歴をまとめて英語で翻訳をする作業をしたのですが、その後、山内先生が英語表現や構成の組み立て方などもアドバイスしてくださいました。医学生時代の頃、大学のサークル活動の一環として、アフリカのザンビアに診療所を作る活動をしていたことがあ



り、もともと海外にも興味があったので、英語での執筆は貴重な経験ができたなと思います。初期研修医がチャレンジすることを後押ししてくれる体制を病院が整えてくれたことに感謝の気持ちでいっぱいでした。

友愛の先生方は常に研修を良くしようと動いてくださり、知識を教える以上に相談ごとにも乗ってくださる、私にとって何か困ったときに自然と手を差し伸べてくださるメンターのような存在だったと思います。ロールモデルとなる先生方がとても多い環境で2年間を過ごすことができよかったと今でも感じています。

将来は病気だけでなく、患者さんの生活に関わることでできる診療科に進みたいと考え、現在は沖縄県立南部医療センター・こども医療センター小児科で専攻医として勤務しています。目標としては、小児循環器の専門医を取得することを掲げています。

後輩のみなさんは、1日1日を大切にその時にしかできないことを後悔がないように取り組んでほしいですね。そして人とのつながりを大切に、色々な人と関わることで自分自身の視野も広げられるのではないかと思います。 ■

現場での経験が
自信に。
鍛えられる研修で
成長を実感



初期臨床研修18期生
又吉貴也

ハートライフ病院専攻医

「大好きなおじいちゃんにいつまでも元気でいてほしい」。おじいちゃんっ子の私は、子どもながらにそんな思いを抱いていました。心臓に持病のある祖父への思いが、医師を目指すきっかけになりました。祖父はいつも高校や塾への送り迎えをしてくれて、私は琉球大学医学部に進学することができました。

友愛医療センターは琉大生の間でも人気の病院で、卒がすぐに埋まってしまい実習には行けなかったのですが、見学に訪れた際に先生方が診療科のことを丁寧に説明してくださり、病院の雰囲気もとても良く、初期研修先を選びました。

特に救急での研修はとても印象に残っています。昼間は当直の夜間よりも、重症度が高い患者さんが運ばれてくることが多いですが、山内素直救急科部長をはじめERスタッフの手厚いフォローを受けながら診療することができ、その場でフィードバックを貰えるのはとても勉強になりました。ドクターカーに同乗し、救急救命の現場で活動することができたのも本当に貴重な経験でした。

友愛医療センターでの当直は、上級医のバックアップを受けながらも、研修医の裁量が大きく、1年目の後半から患者さんの帰宅判断をする権限が与えられるのですが、責任を伴う反面とても鍛えられたという実感があります。また、1年目と2年目と一緒にいる当直体制になっており、後輩の相談に答えられるようになると、自分の成長を感じることも増えました。友愛のいいところは絶対的なサポートがありつつ、適度な負荷を与えて

くれる、そのバランスが取れているところだと思います。

そして、2年目の後半は普段の診療に加えて、群星沖縄主催のアカデミア研究発表会や沖縄県医学会総会、レジデントチャンピオンシップに参加し、相当な忙しさでしたが、先生方のサポートもあってそれぞれ最優秀賞を受賞することができました。その時までは1年目の4月と比べて自分は成長できているのかモヤモヤしていたのが、結果を得たことで自分の自信に大きくつながりました。

現在はハートライフ病院に内科専攻医として勤務しており、友愛医療センターでの研修も予定しています。将来、内科か外科に進むかまだ最終的に決められていないのですが、患者さんと向き合う時間を大切に、患者さんから信頼される医師になりたいと考えています。専攻医になると主治医として患者さんを担当するので責任も増えますが、友愛で教わった知識はもちろん、患者さんと向き合う姿勢や自分自身のメンタル面で鍛えられた経験が今存分に生きています。

後輩の皆さんには、悩むのは悪いことではないと伝えたいです。ただ、悩むのと焦るのは違うと思います。悩んだときに初心に戻って自分は何がしたかったのか、なぜ医師になろうと思ったのか思い出して精一杯、真摯に取り組むことを心掛けていければ、知識や技術は友愛の先生方が大いに助けてくださると思います。そして、いずれは皆さんと一緒に沖縄で働けたらと思っています。 ■

2

内科・心臓血管外科

Internal Medicine
Cardiovascular Surgery
内科・心臓血管外科

友愛医療センター 初期研修医

座談会

医師の土台となる2年間の初期臨床研修。
友愛医療センターでの研修は
実際にどのような雰囲気なのか、その魅力は。
当院で研修を受ける2年目の研修医達に
自由に語り合ってもらった。

診療科や職種の垣根がない 友愛医療センター

生井澤 医師を目指したきっかけは高校生の頃、帰り道と一緒に歩いていた人が急に意識が飛んで痙攣したことがあったのですが、自分はコンビニで氷を買うくらいしかできなくて…。救命士の方が助けているのを見て医療に関心を持つようになり、一番幅広く医療行為ができる医師を志しました。

大城 私は小さい頃から父が循環器内科で働いている姿を見て、同じように人の命に関わる仕事がしたいと思っていました。沖縄出身ですが、大学は岩手に行きボート部に入って充実した大学生活でした。研修先に友愛医療センターを選んだのは、病院見学のときにコメディカルの方と医師がすごくフランクに話していたのと、診療科を越えて垣根なくコミュニケーションを取っているのを見て、思った以上に雰囲気が良いと感じたからです。元々、姉もここですごく良い研修ができたと言っていたので、マッチングは友愛にしか出ませんでした。

趙 高校生のときにスポーツ医療に興味を持って整形外科医を目指しました。その思いは今でも変わっていません。大学生活はサッカー部に所属して、部活にバイトとアクティブに動いていました。大学が北海道だったのでインターネットで就活したのですが、ここは口コミが良かったです。そして実際に見学へ来てみたら本当に雰囲気が良かった。さらに施設が新しくきれいなのも決め手の一つです。

松本 他の皆とは少し違って、私は保育園の卒業文集に「医師になりたい」と書いていたんです(笑)。なので、物心付く前からずっと医師を目指して、苦勞もありましたが保育園のときからの夢が実現しました。大学の実習でこちらに1ヶ月半お世話になったのですが、先生方が和気あいあいと親しげに話していて、すごく働きやすそうだと感じましたね。私も友愛を第一志望で出しました。

熱意あふれる指導医から学ぶ 実践的で豊富なレクチャー

生井澤 実際に働きやすさは抜群です。医局がみんな一緒なので研修医と上級医が常に同じ空間で過ごしていて、学生からすると一見窮屈に思えるかもしれませんが、働いてみると

すごくいい。先生が近くにいるので雑談の流れで色々な話を聞けるのはとても勉強になります。また、医局にはドリンクコーナーがあり、そこでお菓子を食べながら色々な先生とお喋りできるなどコミュニケーションの場になっていますね。

大城 研修も充実していてレクチャーがとても多いです。豚肉を使った気管切開や胸腔ドレーンを入れる手技のシミュレーションは、とても勉強になりました。

趙 そのシミュレーションは他の病院から受けに来る先生もいますよね。以前も八重山から参加されていました。

生井澤 先生たちも教育に真剣というか、熱量がすごくて。市中病院ですがどの科を回っても専門医や指導医の数が非常に多く、規模感が大学病院並みですごいです。

松本 私は内科志望で、内科の専門医や指導医の数が多く魅力かと思っていましたが、入社したら外科系も多くて驚きました。こんなに指導医がいる病院ってなかなかないかな。その分、指導は手厚いですし、相談しやすい先生が各科にいらっしゃいます。実際に内科の診療科が充実しているので内科各科を1ヶ月で回って計6回ローテできるのは内科志望にとっては贅沢な研修だなと思います。

趙 あと、初期1年目の4月は導入期になっていて、1ヶ月間は2年目の先生に付いてカルテの使い方とか基本的なことを学べるのもいいですね。そのおかげで5月からスムーズに各診療科のローテに入れました。

生井澤 私はTOMITECが素晴らしいと思います。JATECという外傷シミュレーションのレクチャーが沖縄だと立地的に受けるのが難しいですが、それを嵩下英次郎副院長が当院



大城彩恵
岩手医科大学出身

でもできるように考案して、同じように教育してくれるのが本当にありがたい。そして友愛だけに限らないですが、沖縄の研修は群星沖縄のプログラムで基幹病院が協力していることがそもそもすごいと思う。琉大のシミュレーションセンターで他院の先生方が色々なレクチャーをしてくれる。これは沖縄ならではのと思うし、県を上げて教育してくれていると感じます。

趙 そうですね。群星沖縄の徳田安春先生による教育回診があるのですが、徳田先生が招聘した外国人の先生を通じてミシガン大学での実習を予定している同期もいます。群星はもちろん、友愛にはチャレンジしたい人を積極的に後押ししてくれる環境がありますよね。

松本 同期の仲間もみんな行動力があるなと思います。自分のやりたいことがあって、そこに向かって突き進む同期のエネルギーにとても刺激を受けました。

趙 私は救急で診た症例を内科学会で発表したことが印象に残っています。準備に際しては平田一仁先生がとても丁寧に指導してくださいました。学会では全国でも著名な先生の講演を聞くこともできまして、大変でしたが充実感があってとても楽しく、非常に貴重な経験をさせていただきました。

手厚いサポートを受けながら 現場経験を積める

大城 当直はどうですか。私は1年目の最初、当直の朝に緊張でお腹が痛くなっちゃうこともありましたが(笑)、上級医の方々が治療方針などの相談にもしっかり乗ってくださり、手厚くサポートしてくれて凄く助かりました。

生井澤 当院の当直は研修医ができる裁量が大きく、責任を感じる場面もありますが、優秀なコメディカルや専攻医の方が多いので深夜帯でも安心感があります。上級医にひけをと

らない知識力やアセスメント力、マネジメント力を発揮してサポートしていただいています。

大城 自分も来年同じようにできているのかなって思うくらいです。

生井澤 しっかり根拠を持って話してくれますし、患者さんに対応する際に専攻医の先生が「ガイドラインではこうなっている」など、一緒に確認してくれるので本当に安心です。

松本 今、救急をローテしていますが、先日ドクターカーに同乗させていただいた事はとても貴重な経験でした。救急では指導医の山内素直先生のフォローが非常に手厚く、素晴らしい経験をさせていただいています。

趙 当院の救急は急成長していますよね。他の病院と比較しても救急のフロアが広いですし、充実していて素晴らしいと思います。先日、韓国人観光客が重症外傷で運ばれて来たことがあって、私は韓国語が話せるので帰国までの手続きなどをサポートしました。当院は空港から近く、観光客の救急が多いのも特徴かもしれません。



生井澤広樹
帝京大学出身

自然豊かな沖縄を満喫! オフも充実

趙 ワークライフバランスでいうと、当直明けは時間通りに帰れますし、有休もしっかり取れていますね。

生井澤 せっかくの沖縄ですし、休日には離島をいくつか巡るなどして楽しんでます。沖永良部島や奄美大島にも行きま



松本英之
琉球大学出身

した。同期の半分くらいはダイビングのライセンスを取っていて、私も取得する予定です。

大城 私も県外出身の同期に勧められてライセンスを取りました。渡嘉敷島などの美しい海でダイビングを楽しみながら、地元沖縄の魅力を再確認しています。

趙 今後の目標としては自分の診断能力を上げるのはもちろんですが、後輩の指導もできるようになりたいです。私は整形外科を志望していますが、患者さんを笑顔にできるような医師を目指したいです。

大城 私は学生時代から医学的な知識と技術と心がバランスよく取れた医師になりたいと思っていたので、日頃から知識と技術を磨きつつ、今後は患者さんがどうしてこの病気になったのか、その背景まで目配りしながら診療にあたりたいです。そして患者さんと信頼関係を築けるようになりたいです。

生井澤 先輩から「初期研修は医療人として知っておかないといけないことがたくさんあって、今のうちにしかできないことをやりなさい」と言われたことが印象的です。自分の志望科がやっと定まってきたところですが、先輩の言葉を意識しながら残りの初期研修に励みたいと思います。

松本 私は神経内科を志望していますが、目の前のことを一個一個真面目に取り組み、そして今後、自分の責任が増えてきつい場面があっても周りに穏やかでいられたらと思います。当院の雰囲気の良いさは文章だけでは充分伝わらないと思うので、医学生にはぜひ実際に見に来て感じてほしいですね。 ■



趙淵石
北海道大学出身

友愛医療センターの
専門研修

ジェネラル疾患を診られる スペシャリストへ



友愛医療センターでは専門医制度において、「内科」「外科」「産婦人科」「整形外科」の4領域で基幹プログラムを提供しています。当院は高度専門医療と救急医療に力を入れている病院であり、沖縄らしく、ジェネラル疾患を診られるスペシャリストを目標として専門研修を行っています。診療科が非常に充実しているため、一般診療の教育から専門分野への移行がスムーズにでき、さらなる高みを目指していけるのが当院の魅力といえます。

当院で専門研修を終えたら全国どこの病院であっても、その学んだ基本が通用する、そういう医師になっていただきたい。現在の制度では、複数の病院で連携して専攻医を指導するという仕組みになっているので、当院で足りない部分があるのであれば他の施設に行き、積極的に学んでほしい。そうして研修期間内で専攻医としての力を身に付けて次のステージに挑戦できる礎を築いてほしいと思います。

また、医療を行う上で答えは一つではありません。「この病気にはこの治療」ではなく、常に複数の選択肢を挙げ、患者さんそれぞれが抱える背景や、施設に備わっている機器などさまざまなことを鑑み、その状況下で最適な治療法を決定する、という柔軟性のある考え方を身に付けてほしいと思っています。

また専門研修は初期研修とは異なります。自分が学ぶだけでなく、後輩の育成や勤務先の利益に貢献したりする必要があります。「研修」と名が付いていることで「学んで勉強すること

が仕事」と考える専攻医の方もいるかと思いますが、そうではなく、ひとりの社会人としての自覚をしっかりと持ち、場合によっては業務上の優先順位も考えながら働いてほしいと思います。

さて、こうしたことを踏まえて指導医として常に大切にしていることがあります。それは、「医療は伝統芸能ではない」という思いです。医療の世界は「日進月歩」であり、覚える知識はどんどん増えていきます。つまり我々が教わったように教えているのは、その進歩についていけません。3年で教わったことを2年で教え、残りの1年は医療の進歩に貢献できる期間にしなくてはいけないのです。医療手技などは「見て盗め」ではだめで、覚える量も内容も働き方でさえ変わってくるのですから、我々指導医が持つ知識や技術を圧縮して、効率よく短期間で教えていかなければなりません。指導する側も互いに成長・進化していかなければいけないということを心がけるようにしています。こうした考えは「医師の働き方改革」を進めていく上でも大事なポイントであると思っています。

最後に友愛医療センターにおいては、医局全体の雰囲気づくりに関して初期研修医を含め、専攻医の先生方の影響が大きいと感じています。多くのことを吸収しようという彼らの熱意や積極性は中堅・ベテラン勢にも刺激を与えてくれて、こちらからもその熱意に応えていかなければと奮起しています。 ■

専門研修管理委員長 加藤功大



内科に加え、
サブスペシャリティーも磨ける

内科

専攻医3年目
茶園歩夢

内科の中でも消化器内科をサブスペシャリティーとして専門研修に励んでいます。沖縄協同病院での初期研修は内科一般でのローテが中心でしたので、専門研修では内科を学ぶにあたって診療科が充実している友愛医療センターを選びました。

専門研修の3年間のローテーションについて相談することができるのは当院の魅力だと思います。当院は内科各科を満遍なく回る総合内科基本コースとサブスペシャリティー重点コースがありますが、私は消化器を重点的に研修しながら内科一般の症例を集めることができています。さらに、私の例を上げると3年間のうち最初の1年間は友愛医療センター、9ヶ月間は中頭病院、そして沖縄協同病院、久米島での地域研修を経て当院に戻ってくるというように、希望すれば県内外の病院での研修も組み合わせることができます。当院は提携している病院がとても豊富で、自分の希望に合わせた研修をカスタマイズできるところも素晴らしいですね。

消化器を専門に選んだのは、患者さんの数が多いことと、治療した後の効果が目に見えてわかることにやりがいを感じたからです。手に職ではないですが、自分の手先で治療できる技術を身に付けたいと思っています。初期と異なり専攻医は主治医として患者さんを担当するので責任も増します。患者さんには特に専門用語の多い内視鏡検査の内容はなるべく分かりやすい言葉で説明するように心掛けています。

専門研修である程度の内視鏡の措置を身に付けて、今は消化管・肝・胆・膵の全ての分野に面白みを感じており、内科専門医を取得した後は、消化器内科をサブスペシャリティーとしてさらに専門性を磨いていきたいと考えています。消化器内科ばかりで修了要件の内科症例が足りるのかと思うかもしれませんが、友愛医療センターでは内科一般の症例のバックアップもあるので問題なく、安心して自分の専門性を磨くことが可能です。

外科

専攻医2年目
桑江一希

全身を診られる科に行きたいと思い、内科か外科で漠然と悩んでいましたが、友愛医療センターの初期研修で外科を回ったとき、手術によって実際に命が助かった患者さんを目の当たりにしました。そこで、やはり手術をしてみたいという気持ちが強くなり、外科の分野に飛び込んでみようと思いました。

専門研修でも当院を選んだのは、何かあればすぐ上級医・指導医が相談に乗ってくださる環境が整っているからです。また、当院は上下部消化管から肝胆膵など幅広い分野の手術を満遍なく学べることや、救急や外傷の症例も経験できることに加え、専攻医でも先生方のサポートのもとで手術の機会を与えてくれるので自分自身の成長につながるのではないかと考えました。

先生方に付いて手術に入るだけだった初期研修とは異なり、紹介や救急で来院した患者さんの診断から説明、手術、手術後の経過観察まで治療方針の計画を立てるので責任は大きくなりますが、治療が上手くいって患者さんが退院できたときはとてもやりがいを感じます。

指導医の先生から「せっかく医者になって外科で手術ができるのだから、目の前に苦しんでいる患者さんがいれば待つ必要があるのか、すぐに治療ができないかと考え、そして実際に自分がやっている治療が本当に患者さんにとって最善かを常に考えなさい」と言葉を掛けられたことがとても印象的で、自分の中で常に意識しています。

外科は診療以外にも手術動画などを見ながら自主的に手技の勉強をする必要があり、仕事の占める割合が増えるかもしれませんが、それでも自分の手術によって危険な状態にある患者さんを助けられるという点では非常にやりがいのある科です。そこに興味がある方はぜひ外科に来てほしいと思います。

幅広い分野で、
手術機会も





周産期、婦人科、 不妊まで一連で学ぶ

産婦人科

専攻医1年目
正本真利子

初期研修から継続して友愛医療センターで専門研修を受けています。当院の産婦人科は診療内容が充実しており、周産期から婦人科腫瘍、そして不妊内分泌の分野までを基礎から一連の流れで学ぶことができます。さらに、専攻医に対する教育体制が非常に手厚く、どの先生方も空いている時間は常に専攻医のバックアップに入ってください、集中的に指導して下さるのでとても恵まれた環境で研修をさせてもらっていると実感しています。また、連携している病院も非常に多く、高リスク出産といったNICUでの症例を学びたい場合は院外での研修も可能なので、幅広い選択肢から自分に合った研修を組み立てることができます。

ことしの4月から当院で専攻医として働き、この3ヶ月でも多くのお産に立ち会うことができました。患者さん本人やご家族、スタッフとともに「おめでとございます」と言える空間で、新しい命が産まれる瞬間の感

動を分かち合えるのはやはり嬉しいです。お産まで患者さんと10ヶ月かけて信頼関係を築きながら一緒にお子さんの成長を確認できるのも産科の魅力ではないでしょうか。一方で、婦人科ではがん患者さんの治療に入り、緩和ケアなどの終末期医療も学びます。難しい婦人科疾患の患者さんと、上級医の先生方とチームで治療介入しながら急性期のICUから退院して外来フォローまで繋げられた経験はとても印象に残っています。

現在は上級医の先生に付いていただきながら患者さんを担当していますが、先生方の患者さん一人ひとりへの気遣いや配慮が本当に素晴らしく、感銘を受けています。技術面での独り立ちに向けて一つひとつできることを増やしつつ、「また何かあったときに先生に診てほしい」と患者さんから頼られ、信頼関係を築いていच्छる上級医の先生方のようになりたいと強く思っています。 ■

整形外科

専攻医4年目
城間大

友愛医療センター整形外科での専門研修は、分野ごとに専門性が分かれていて、多くの手術症例を経験できるところが魅力です。各部位で診療チームが分かれているのは市中病院では珍しく、各専門の先生に相談できるので非常に勉強になっています。現在は膝関節の分野をローテーションして集中的に学んでおり、指導医や上級医の先生方の助手として人工関節の手術などに入らせてもらう場合はマンツーマンで細かい部分まで丁寧に指導して頂いているほか、救急で来院した外傷患者の手術を執刀で担当することもあります。

実家が整形外科で開業していることもあり、初めから整形外科一筋で専門医を取得しようと決めていました。こちらの研修に来る前の病院は専門分野を細分化して

おらず整形全般を診る体制でしたので、今後どの分野を専門にするかまだ決めていません。当院で研修をしていて膝関節にも面白みを感じていますし、今後は股関節の分野もローテーションする予定なので、色々経験した中で決めていこうと思っています。

整形外科医はよく大工さんに例えられますが、手術ですと骨折の治療をしてきれいに元通りになった時は気持ち良いですし、人工関節では上手く金具がはまり動きがスムーズになるとやりがいを感じます。そして骨折などで歩けない状況だった患者さんの痛みが取れて歩けるようになった姿を見ると、日常動作の改善に寄与できた実感でき、喜びを感じる瞬間です。

整形外科の一番の醍醐味は、患者さんが生活する中で困っている関節の痛みや、身体が動かしづらいといった悩みを根本的に治して、患者さんの生活の質を上げられることだと思います。また、外傷治療をはじめとして、比較的早い段階から手術に関われることも魅力です。当院は各分野を専門的に学ぶことができ、かつ手術も数多く経験できるので充実した研修ができると思います。 ■



各部位別チームで 専門性高く

編集後記

とても印象的だったのは、指導医の先生方がとても嬉しそうな表情で研修医に教えたことが実際の医療現場で活かされたエピソードを語る姿。研修医の活躍が指導医のモチベーションにも繋がっているようです。当院は実践に即した独自のレクチャーが豊富で、教育こそが患者さんの医療に還元されるという信念を体現していると感じました。(広報誌編集委員・金城)



社会医療法人 友愛会

〒901-0224 沖縄県豊見城市字与根50番地5
TEL.098-850-3811 FAX.098-850-3810

広報誌フェイス

発行人／比嘉国基

編集／広報誌編集委員会

印刷／光文堂コミュニケーションズ株式会社



友愛会HP



臨床研修医HP